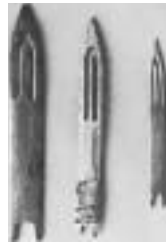


財団だより

多摩川

2002. 9 第95号



網針

大田区立郷土博物館蔵



多摩川調布取水堰下（2002年7月）

多摩川現風景

(51) 多摩川遡上アユ

東京都は毎年4月～6月に多摩川調布取水堰下で小型定置網を設置して東京湾から多摩川へ遡上する稚アユの調査を行っている。採れたアユの数から多摩川に遡上するアユの数を推定すると、本年は約113万尾で過去19年間の調査では、平成5年の130万尾に次ぐ遡上量になるといふ。(東京都水産試験場ホームページによる)

7月21日河口より17km上流(二子玉川付近)で釣り人に聞いたところ、今年のアユは成長が悪く全体的に小ぶりとの事。原因は河床の石にヘドロが付着し、川藻が生育しにくい上に大量のアユが遡上したため餌不足ではないかとの話であった。

この釣り人に聞いたところ、アユの釣りは「友釣り」と「ころがし釣り」が一般的で、「友釣り」は多摩川上流、秋川で多く用いられ、「ころがし釣り」は中下流で多く用いられるという。

「友釣り」は釣り糸の先におとりアユを付け遊泳させ他のアユの縄張りに入るとおとりアユを攻撃する習性があり、この時に他の釣り針で引っ掛けて釣り上げ

る方法。「ころがし釣り」は川底の石のまわりに定住しているアユを数本の釣り針で川底をころがして引っ掛けて釣り上げる方法だといふ。

・関連する財団の研究助成

< 学術研究 >

多摩川水系における川漁の技法と習俗

1983 安齋忠雄 安齋宣伝研究室 (No.63)

護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との関連について

1988年 玉井信行 東京大学 (No.113)

多摩川流域における魚類民俗に関する研究

1996年 秋篠宮文仁 山階鳥類研究 (No.172)

< 一般研究 >

多摩川における組合漁業の歴史的考察

1994年 宮田 満 福生市教育委員会 (No.87)

溪間工が河床形態(瀬・淵構造)に及ぼす影響と渓流魚類の生息に関する研究

2000年 山下 晃 放送大学 (No.122)

多摩川における川魚漁のあゆみと遊漁(釣等)

2000年 笹川耕太郎 都立田園調布高校 (No.124)

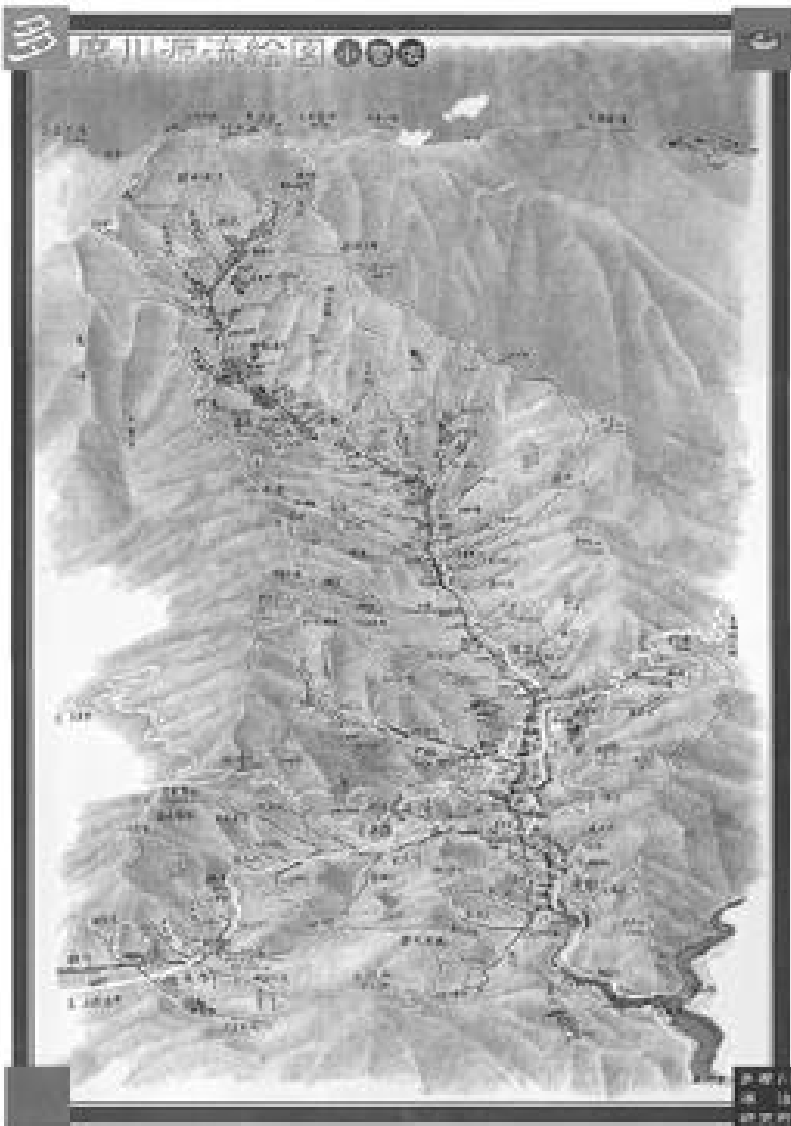
多摩川散歩

「多摩川源流絵図」小菅版の作成にあたって

多摩川源流研究所長 中村 文明

「多摩川源流絵図」小菅版作成の目的

「多摩川源流絵図」小菅版が、2002年5月2日に完成した。「源流絵図」小菅版を作成するため、2000年3月に調査活動を開始したが、この取り組みは、小菅村の廣瀬村長や降矢教育長をはじめ小菅村役場の全面的な支援と、村の高齢者学級の積極的な協力を得て進められてきた。また、とうきゅう環境浄化財団の研究助成が大きな励ましになったことは申すまでもない。



多摩川源流絵図小菅版

今回の調査・研究の目的は二つある。第一は小菅村に所在する淵・滝・沢・尾根・小字等の地名とその由来の聞き取り・記録・保存・継承にある。

目的の第二は、小菅村における調査・研究の成果を「多摩川源流絵図」小菅版として完成させることにある。源流には自然、歴史、文化などの優れた資源が数多く隠されている。この源流のタカラモノを発掘し、記録し伝承したいと考えた。2年間に及び取り組みで「源流絵図」小菅版を完成させることが出来て安堵した。今、「源流絵図」奥多摩版の実踏調査に取り組んでいる。

「多摩川源流絵図」小菅版の特徴について

「源流絵図」小菅版の特徴の第一は、小菅村に所在する滝、淵、沢、尾根などの名称とその由来の調査が大きく進展したことである。滝や淵に関しては、妙見五段の滝、天狗の隠れ滝、ドウドコロ淵、まがり淵等48ヶ所を実踏調査してきた。沢に関しては布小屋沢、見晴沢、玉蝶沢、天狗棚沢等65ヶ所が判明した。

特徴の第二は、小菅村の8地区にある114の小字に関する地名とその由来をまとめ上げることが出来たことである。小菅村の東部、白沢、小永田、中組、田元、川池、橋立、長作の各地区を回り、長老や地区精通者に小字に関する由来を聞き記録することが出来た。

今回の小菅村における地名の調査に取り組んで、地名の生まれてきた背景、地名の変遷、地元の方々の地名への思いなどに直接触れる機会を得た。身近な地名の一つ一つに人間の生活や暮らし、文化や歴史が織り込まれており、地名は無形文化財として重要な価値があるように思えてならない。この源流域における地名とその由来の研究を通して、古代から生きてきた人間の生活体験の原点がここに色濃く残されている想いを益々深くした。

私と多摩川



ウラギクの咲く水辺・六郷橋近く (99.10)

多摩川の自然を守る会 古屋のり子

私は2002年5月にA5版144ページほどの白黒印刷で[多摩川下流の植物]という本を自費出版しました。

この本は、私の住居の近くを流れる多摩川の下流部は、中・上流とは少し異なった自然環境が残っており、私が調べた植物の特徴や、フィールド活動などを伝えたいという願いをこめてつくりました。

内容は、多摩川の河口の0キロ基点から、国土交通省が青梅61.8キロまで、200メートルごとにコンクリート杭を打ち込んだ距離標の、8キロ地点あたりまでの兩岸の河原の植物を7年ほどかけて調査し、356種の野草をスケッチしたものに簡単な説明を加えました。

かつて、このあたりの多摩川は六郷川と呼ばれていたもので、副題を「六郷川の河原の野草」としました。文中の植物群生地などは、距離標の数字を書いた巻頭の地図を見ると、おおよその場所が分かるようになっていきます。

本の文章部分は、河口部の植生の特徴(海浜・塩沼地・汽水の植物など)・自然環境の変化(人の不法な侵入により、絶滅危惧種のウラギクやタコノアシが減少している現状)・野草の料理法・毒のある草・染料になる植物・帰化植物・江戸時代頃に多摩川周辺で見られた植物などについて書き、原

稿を書く際は、私が会員になっている、多摩川の自然を守る会・(社)日本植物友の会・参加した講座の先生方に教えていただき、学びながら本を書きすすめました。

本は初め、印刷部数を300部とし、知人に配り、あとは下流部の自然環境を知ってもらうために役立てようと考えていました。

ところが出版してすぐに、新聞の都民版に大きく紹介され、掲載されたその日の早朝5時から、本の申し込みの電話が鳴り続け、電話が繋がらないという苦情や問い合わせが殺到するという状況が一週間以上も続きました。

申し込んでくださった方々は、小金井、調布など多摩川に近い所や都内全域からで、身近な植物の名前を知りたい方、お孫さんに草の名を教えたいと言われる方などさまざまで、本を見て草の名前が分かりましたなどの嬉しいお便りや励ましの言葉をいただきました。

また、本を作った私の目的の一つでもある、区内の全図書館と多摩川関連機関への寄贈をし、地元の植物好きな方や自然観察会のリーダーの方にも購入していただきました。本は三刷りし、900部刷りましたが8月のはじめで残りがわずかになりました。

この夏から登戸の「せせらぎ館」で販売していただけることになりました。残部のあるうちは、交換や販売を致します。

申し込みは 古屋のり子
電話 03 3739 0866
メール furuya-n@rh.xdsl.ne.jp
一冊1000円、送料310円です。

多摩川はいつ訪れても私には植物を通じて新しい発見のあるところで、これからも多摩川をテーマに新たな作品を、と夢を描いています。

私の出版体験が、多摩川のさまざまな分野で活動されている方々にとって、ご自身の記録を本として残される時の、ささやかな参考になってくれたら嬉しいことです。

環境雑感

環境と文化をつなぐ風景

中村 良夫

渡良瀬川が利根川に合流するあたり、左岸の自然堤防と猿島台地にはさまれた低地に、かつて御所沼と呼ばれる美しい沼が水をたたえていた。戦後、食糧増産のかけ声のなかで干拓水田化され、そして減反政策とともにうち棄てられたこの場所に沼がよみがえり、公園としての装いが与えられた。エコロジカルな彩りの強いこの計画は、古河公方の御所址を包む、森や沼を復元する歴史遺産の再生プロジェクトでもあった。

工事が概成し、利用段階に入った古河総合公園ではいま、市民の利用を促すため、パークマスター制度を導入している。市民と行政の間に立って、触媒の役目を担うパークマスターは、緑地管理だけでなく、公園の楽しみを工夫し、その魅力を発見するよう市民を勇気づける。

今では町の自慢になった3月の桃の花祭りは40万人が訪れる年中行事になったが、むしろきめ細かな多くの小集會に注目して欲しい。春には野遊び、田植え、秋にはお月見、虫聴きの集い、さまざまな市民団体がその特技を生かした活用を企画するようパークマスターが支援している。

森と沼に入り交って楽しむ老若男女は互いに点景となつて風景に命を与え、工夫された遊びに準じて野の末、沼の辺に自からの風景を見出すだろう。風景の創り手と鑑賞者のあいだの溝は消えようとしている。

こうして発見されたういういしい風景は、年中行事のようにくり返し体験され、やがてふるさとの風景として共有され成熟するに違いない。この公園は風景を触媒として、都市化が壊してしまったコミュニティの再建を後押ししているのだ。

ところで、生命の多様性と健康が危うくなるにつれ、環境と文化との間には、大きな溝ができてしまった。生物科学の概念であるエコロジーと、人間精神の創造性と生きる意味を問う文化。この、二つの倫を異にする世界をつなぎ合わせ、さらに、新しいコミュニティを組み上げることが新世紀に課されていると思う。たとえば、里山文化というような環境と文化の古典的な融合形式は、この難問を考える

ときにおおいに励みになるように思われる。

たしかに、この里山文化という風雅な社会・環境システムに学ぶところはおおきいが、都会化した現代の生活様式に適った新しい融合形式を生み出す努力が求められるだろう。たとえば、物質とエネルギーのリサイクルの制度化。最近、急速に注目を集めてきたこの環境制御の制度も人間の創る文化に違いない。

この融合方式が環境と文化の物質的な側面を司どるのに対し、文化の精神面を豊かにする、融合が成熟して欲しい、と思う。

森や沼の茫洋としたたずまいは、生態系の急所でもあり同時に人間の文化としての風景にとってなくてはならぬ存在である。風景という直観的な認識によって環境と文化とは和解し、新しい環境美学が成立するだろう。

古河の公園は、都市のなかに森と沼の入会地を再生した。現代の生活感情にかなった風景デザインを通じて、環境と文化の新しい融合型式をうち建て、さらに都市化で解体されたコミュニティの再建を目指す実験が成功して欲しいと思う。

(参考文献「研ぎすませ風景感覚2・国土の詩学」技報堂)

筆者プロフィール

中村 良夫(なかむら よしお)

東京工業大学名誉教授

略 歴

1938年生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業、日本道路公団技師、東京大学工学部助手、講師、助教授、東京工業大学社会学科助教授、教授、京都大学土木システム工学専攻教授を経て、1999年より現職

主な団体職

(財)とうきゅう環境浄化財団選考委員、国交省手づくりふるさと賞選考委員、同都市景観大賞選考委員長、関門景観委員会会長、文化庁国際交流懇談会委員、環境協会評議員、環境情報センター評議員、土木学会土木史委員会委員長

専 門

景観工学、空間記号学

主な著書

「土木空間の造形」(技報堂)
 「風景学入門」(中公新書)
 「風景学・実践編」(中公新書)
 「研ぎすませ風景感覚」(技報堂)
 「街路の景観設計」(土木学会)
 「景観づくりを考える」(技報堂)

第8回 助成研究ワークショップを終えて

毎年夏休み時期に開催しております恒例の財団主催の「助成研究ワークショップ」が8月1日100名の参加者のもとに国連大学で開催されました。本年は第8回目となり、テーマは「好奇心をゆたかにする環境学習の取組みについて」でした。

21世紀の地球環境を守るためには、これからの時代を生きる子供たちが環境問題に取り組む環境学習が極めて大切であることは異論がないところです。本年4月より公立の小中学校で「総合的な学習の時間」と「完全週休2日制」が実施されています。総合的な学習は地域の特性に応じた参加型の環境学習に関心が集まっているとのことで、特に川は環境教育の場として大変すぐれていると言われていています。川に行き自然と触れることで、環境問題や生態系、生命の大切さを学べるのみでなく、感性や想像力、思いやりも生まれる。「自ら学び、考え、解決する」能力が養成され、子供たちに求められている「生きる力」が身につくものと思います。

財団理事長 五島 哲の挨拶に引き続き、前半は研究者による報告が行われました。

コーディネーターは岩間、コメンテーターは桐蔭横浜大学 生命環境工学研究機構長・工学部教授 涌井 史郎先生にお願いしました。

報告1 「用水を総合的な学習に生かす 一日野の用水を例として」

八王子市立第八小学校 教諭 小坂 克信

日野市の用水(約170km)の中にはまだ田んぼがあり、子供たちが魚やザリガニを取るなど自然との交流が可能な場所もある。「総合的な学習の時間」に用水を取り上げることが出来るように、教師用、児童用の教材を作成している。子供たちが好奇心をもって取り組む体験的な学習により用水の良さを知り水の大切さを学び、環境問題を広く理解して欲しいと報告されました。

報告2 「地質野外実習地としての多摩川中流域 および狭山丘陵に分布する上総層群の 露頭の現状とそれに基づく教材開発」

慶応義塾幼稚舎 教諭 馬場 勝良

多摩川中流とその支流および狭山丘陵地域に上総層群の露頭が点在する。河床は人工的な改善が少なく平坦地である。馬場先生が所属する北浅川化石

調査団が最近発掘した古代象の牙や臼歯などのほかアキシマソウ、メタセコイヤ等有名な化石が数多く発見されており、地質野外観察の場所として注目されている。野外実習教材の対象地として10ヶ所を定めて解説され、地質学について経験のない指導者でも野外実習が指導できるようにマニュアルを作成していると報告されました。

報告3 「環境教育、特にフィールドマナー (野外活動における倫理の視点から捉えた 多摩川の保全に関する研究)」

淡水魚研究者 君塚 芳輝

河川をフィールドとする環境学習が年々盛んになっている。河川での観察を安全に行うため、指導者は蛇行と深浅など川の構造の理解と安全監視の作法(特に三角監視法)の修得が不可欠である。また、胴付長靴を使用する機会が多いが、ウエストベルトを着用しないと転倒時に上から大量の水が浸入し、自力で起き上がることが出来なくなり極めて危険である。

魚探りの留意事項として、使用する手網は柄と網枠のしっかりしたものを選ぶこと。簡単に変形するやわらかい網枠は危険である。さらに河川での環境学習はフィールドマナーを修得し、十分すぎるほどの安全配慮が必要である旨、報告されました。

後半の総合討論会は質疑応答形式で行われ、環境学習に携わっている参加者から具体的な良い質問や提言が多数ありました。

最後に全体を総括して涌井 史郎先生から各研究報告について丁寧なコメントがありました。さらに先生は7月中旬から2週間に亘りアフリカケニアのマサイマラ国立保護区のマラ河の河畔で高校生30名とキャンプをはり、野生教育の指導をされ、帰国したばかりでしたので、高校生の体験学習について伺うことが出来ました。

自然と共生するマサイの人達が環境問題に対して自ら行動し、立ち向かい、解決している知恵と取組みについて高校生が緊張感を持って実体験し、たくましく学習した旨を述べられ、環境学習の取組みについて示唆に富んだ有意義なものでした。

来年度も環境問題の改善に役立つテーマを選びワークショップを開催したいと思います。

首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）は、昭和50年度より多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に414件の研究に助成金を交付し、356件の研究成果が完成しています。

平成15年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究
多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 応募方法 当財団所定の申請用紙をご請求（返信用切手200円同封）され、学術研究・一般研究いずれかを選択して、ご申請下さい。当財団ホームページからも入手できます。

4. 助成の決定 平成15年3月の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会で決定。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民が、特別の学識経験を必要とせず取り組めるもの。
	（財団の過去の事例を参照）	
1件当たりの助成金総額の上限額	600万円	300万円
単年度の助成金上限額	300万円	150万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 原則対象外。ただし、所属機関・個人所有もなく研究に必要不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る。 (2) 消耗品費 調査研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 機器・備品等の借料、通信費、その他。	

6. 公募締切日 平成15年1月15日

応募についての詳細は、財団事務局にお問い合わせ下さい。

- 発行日 平成14年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyueuv/>

*印刷所 雄文社 〒336-0001 さいたま市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125

